

京都大学言語学懇話会  
1990年度活動報告

## 第22回例会

1990年4月7日(土) 午後1:30~4:30

京大会館211号室

研究発表

「ドルガン語の形成と言語接触について」 藤代 節 (D3)

「アジアの諸言語における閉鎖子音の発声タイプについて」  
清水克正 (名古屋学院大学)

## 第23回例会

1990年7月14日(土) 午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

「現代ビルマ語の派生名詞 V-saya\_ について」 澤田英夫 (D3)

「Diglossia or lingua franca — 10世紀トルキスタンにおける  
チベット語使用状況をめぐって — 」 武内紹人 (京都教育大学)

## 第6回大会(第24回例会)

1990年12月21日(金) 午前11:00~午後5:00

京大会館102号室

開会の辞

西田龍雄 教授

研究発表

「中国語の[V-得]の構造と[V-V]複合動詞の構造の並行性について」  
沈 力 (D1)

「現代チベット語における動詞を含む形容詞について」  
高橋慶治 (D2)

「小量評価数量表現を取り立てるモについて」 前田広幸 (大阪女子大学)

「現代日本語副詞の再整理について」  
— 主観性を表わす副詞類を中心にして — 森本順子 (京都教育大学)

「バスク語における発話場面の関与者を示す動詞接辞について」  
白附紀子 (D3)

「コエグ族の多言語使用について」 稗田 乃 (大阪外国語大学)

藤代 節

北西シベリアのタイムル半島に分布するドルガン族の言語、ドルガン語(долганский язык)は、これまで単純にヤクート語の一方言と考えられてきた。しかし、この言語は周辺に位置するエベンキ語などのツングース系言語やロシア語、さらにはサモエド系言語からも影響を被りながら成立した言語であって、その取り扱いはずしも容易ではない。本発表では、(i)ドルガン語の形成と(ii)そこにおけるこれら周辺言語との接触の痕跡について考察した。(i)については、ドルガン語とヤクート語諸方言の共通性を、語彙と標準ヤクート語の語頭のsに対応するhの分布から検討した。その結果、ドルガン語の形成には、近隣に分布するヤクート語方言ばかりでなく、ヤクーチヤの北東部の方言との繋がりも否定できないことがわかった。(ii)については、まず語彙の面から特に親族・身体名称、数詞に注目した。ドルガン語ではヤクート語の語彙形式が専ら採用されているものの、それら語彙のドルガン語への組み込まれ方はエベンキ語の語彙構成をよく反映している。

さらに、言語接触の観点からドルガン語において興味深いのは命令形である。この点についてはまず、ヤクート語の命令形に、ドルガン語を除く他のチュルク系言語とは異なり、近未来と遠未来の2形があることから考察をすすめた。ヤクート語がこのように2形を持つのは、満州語とオロチ語を除くツングース系言語が命令形にやはり2形を持つことから、かつてヤクート語がエベンキ語と接触したためではないかと考え得る。さらに、ドルガン語形成において、エベンキ語とヤクート語が「再」接触し、ヤクート語の命令形を保存あるいは拡張する形で、さらに遠未来形の第二形と考え得る命令形を持つに至った。(藤代 1990 参照)

複数の言語が関与したドルガン語の形成において、このようにヤクート語が中心となったのは、1つにはロシア語が今日のように広くシベリアの諸民族に浸透していなかったある時期にヤクート語がリング・フランカとしての役割をこの地域で果たしていたことを示唆している。

現在、ドルガン族が主に居住するヘタ河、コトウイ河、さらにこれらの合流するハタンガ河流域の村々ではドルガン語の教育が、未だ試験的ではあるが、近年作成されたドルガン語の文字(キリール文字に基づく)を用いて行なわれているという。

参考文献  
Убрятова, Е.И. (1985) Язык норильских долган. Новосибирск:Наука.

藤代 節 (1990) 「ドルガン語の成立過程について」『内陸アジア言語の研究』第V巻. 神戸: 神戸市外国語大学外国語研究所. (ふじしろ せつ, 博士後期課程)

## アジアの諸言語における閉鎖子音の発声タイプについて

清水克正

本研究は、アジアの言語のうち日本語、中国語、韓国語、ビルマ語、タイ語およびヒンディー語における閉鎖子音の発声タイプの音響音声的特徴を解明しようとしたものであり、具体的に次のことを調べた。(1) これらの言語における子音の有声性・無声性の弁別上の特徴は何か、(2) 同一音声記号で表記される分節素に関し、言語間にどのような類似性、差異があるのか、さらに(3) 諸言語間の音声的特徴の差異はどのように音声理論の中で取り扱えるのか。今までに閉鎖子音の有声性・無声性の諸言語間の比較について、幾つかの研究が成されているが、本研究では、声帯振動の開始時間(VOT)、基本周波数(F<sub>0</sub>)とそのパターンおよびスペクトル分析について調べた。調査は、諸言語の音声データを音響的に分析したものであり、次のようなことが明らかになった。

声帯振動の開始時間(VOT)は、子音の有声性・無声性の弁別に有用な特徴であり、日本語、中国語、ビルマ語およびタイ語に関してはその弁別に機能するが、韓国語とヒンディー語では十分に機能しない。次に、VOT値の分布範囲は各言語間で差があり、日本語/p, t, k/ではかなり広い範囲に分布しているのに対し、中国語、タイ語およびヒンディー語の/p, t, k/では狭い範囲に分布している。このことから、各言語の主要範ちゅうの数と分布する範囲に相関性があることが窺える。

基本周波数(F<sub>0</sub>)については、有声性・無声性に密接に関連しており、一般的に予測されるように、無声子音に後続する母音のF<sub>0</sub>値は有声子音の場合よりも高い。さらに、諸言語において各範ちゅうのF<sub>0</sub>値はかなり異なっており、声門の緊張の度合いと気流の状態等に差があることを示している。特に、F<sub>0</sub>に関して注目できることは、韓国語の濃音、ヒンディー語の有声帯気音において、特徴的なパターンが現れていることであり、他の範ちゅうとの弁別を明確にしている。

スペクトル分析に関しては、強さ(intensity)およびスペクトル・パターンに有声性・無声性の差がみられるが、諸言語間の検討においてはこうした差は一貫したものではない。一般的な傾向としては、無声音では有声音よりもより高い度合いの強さを示しており、これは呼気流の差を反映したものと考えることができる。

このように、調査した言語は、有声性・無声性の弁別に幾つかの音響上の特徴を使用しており、その使用には各言語に共通するものとまた個々の言語を特徴づける個別言語的なものがある。個別言語的な特徴は、喉頭に関与する素性の差として捉えることができ、さらにそうした素性が具体的な音声レベルでどのように具現されるかに依存している。

(しみず かつまさ、名古屋学院大学)

現代ビルマ語の派生名詞 V-saya\_について

澤田 英夫

ビルマ語で、動詞に接辞-saya\_を付加することによってできる形式は、従来一般に「派生名詞」「動名詞」としての取り扱いを受けてきた。しかし、その派生名詞が何を指示対象とするかということは明らかにされず、またイディオム的であるとされるいくつかの用法において、なにゆえそのような意味が生じるのかということも、つきつめて考えられてこなかったように思われる。本発表では、以下に示す文の意味を考察し、それらの文で用いられる派生名詞 V-saya\_が V の表わす事象を惹き起こす要因となる事物・属性・状況などを指示するものであるということを主張する。

(1) koun\_pani\_-alou' sei' hyou'-saya\_ ^ci: ^phe: || ・会社の仕事はひどく  
会社 仕事 気持ち 乱れる SAYA AUG <強調> 煩わしい。

(2) koun\_pani\_-alou' sei' hyou'-saya\_ kaun: ^te\_ || ・会社の仕事は煩わしい。  
富む VSM

(3) txu\_ pagan\_-myou. ^kou\_ txwa: ^saya\_ hyi. ^txa-la: || ・彼はパガンへ行く  
彼 パガン 町 GOAL 行く SAYA ある VSM <疑問> 用事がありますか？

(1)の sei' hyou'-saya\_ が名詞類であることは、例文中にあるように拡大辞-ci: や複数助辞-tei\_ を取り得ることから明らかである。また、対応する以下の通常動詞文(1')の koun\_pani\_-alou' に付加された関係表示の形態素が、(1)には現れない。

(1') txu\_ koun\_pani\_-alou' -atwe' sei' hyou' -te\_ || ・彼は会社の仕事のせいで  
彼 会社 仕事 …のため 気持ち 乱れる VSM 心を煩わせている。

よって koun\_pani\_-alou' は sei' hyou' - の項でなく、(1)は2つの名詞的要素からなる名詞文である。この場合の sei' hyou' -saya\_ の指示対象は、「心を煩わせる」という感情を惹き起こす事物すなわち「煩わしいもの」である。

(2)でも(1)と同様、koun\_pani\_-alou' は関係表示を伴わない。しかし、(2)は動詞 kaun:- を主動詞とする動詞文である。語順交換・話題化・疑似分裂文化におけるふるまいから、(2)は koun\_pani\_-alou' を大主語とする二重主語文であると考えられる。kaun:- は通常「良い」と訳されるが、ここでは他の例にも見られる「富む」の意味に解釈するのが妥当である。そして sei' hyou' -saya\_ の指示対象は、「心を煩わせる」という感情の惹起要因となる、事物に内在する属性である。

(3)では、pagan\_-myou. は格標識-kou\_ を伴っており、動詞 txwa:- の項であることを示している。語順交換その他におけるふるまいにより、(3)も三重主語文である。この場合、-saya\_ は動詞句 pagan\_-myou. ^kou\_ txwa:- を取って派生名詞を形成する。その指示対象は「パガン市へ行く」という事象を惹き起こすような何らかの外的状況である。

(さわだ ひでお、博士後期課程)

沈 力

中国語の[V-得]文には、(1)のような結果を表す補語をとるものがある。

- (1) a. 小明 哭得 张三 很烦。 /小明は張三がいやになるほど泣いた。  
b. 小明 唱得 张三 睡不着。 /小明は張三が眠れないほど歌った。  
c. 这瓶酒 喝得 张三 大醉。 /この酒は張三に酔っ払わせた。

(1)の3文では動詞に[-得]が後続することは共通する。しかし、Vの性質が異なる。(1a)の「哭」が1項動詞であることは(1b)や(1c)の場合と異なる。また、主語が「唱」の行為者である(1b)が、主語が「喝」の受動者である(1c)とも異なる。

従来の諸説では、Vが主動詞で[-得]が単なる補語を示すマーカーであると考えられている。しかし、それに従えば、(1)の3パターンを統一に説明するのが難しい。本発表では、従来の諸説に反して[-得]が本動詞である、つまり、[V-得]は複合動詞であることを提案する。実際、他の[V1-V2]複合動詞にも(1)の3パターンが見られる。次の(2)は(1)と平行する。

- (2) a. 小明 哭烦了 张三。 /小明は泣いて張三を煩わした。  
b. 小明 唱醒了 张三。 /小明は歌って張三の目を覚めさせた。  
c. 这道菜 吃坏了 张三的肚子。 /この料理は張三のお腹を壊した。

(2)の3文では、V2が使役を表す点は共通している。しかしV1の性質が異なる。(1)と(2)が平行するのは、[-得/-V2]の性質は不変であるが、[V/V1]の性質が様々であるということである。本発表では、更に[-得/-V2]が複合動詞の中でヘッドであることを提案する。以下の現象がこの提案を支持する。1.[V-得]や[V1-V2]の複合動詞と共起する副詞は[V/V1]と共起するとは限らない。2.[V/V1]として具体的な意味を持たない動詞「弄/搞(する)」であってもよい。3.複合動詞が文主語をとる場合、[V/V1]は文主語中の動詞の「コピー」か弄/搞である。4.V1の項が削除されつつ、V2の項が削除されえない。

もし、[-得]が本動詞かつ複合動詞のヘッドであると考えれば、[V-得]文の特徴がより正しくとらえられ、(1)と(2)を統一に説明するのに新しい道が開かれると思われる。

(しん りき、博士後期課程)

高橋慶治

ここで、「動詞を含む形容詞」というのは、いわゆる「複合形容詞」であり、ここでは、動詞と形容詞が複合したものを扱う。現代チベット語の複合形容詞については、記述されているところが少ない。基本的には、

ˈkhalaa ˈti ˈsa ˈtepo ˈree · この食事は食べやすい

における下線部のように、'V+Adj' という構造を持ったものである。

1. チベット語では、一般的に、形容詞は、名詞に対し後置されるが、複合形容詞では、前置されることもある。

(1)a. ˈkhalaa ˈsa ˈtepo ci ˈsoroo nan · 食べやすい食事を作ってください

b. ˈsa ˈtepöö ˈkhalaa ˈsoroo nan · (同上)

2. 複合形容詞が後置される場合、修飾される名詞の格が変化することがある。本来持っていた格助詞を失って、絶対格の形で生起する場合、この名詞句は、複合形容詞から直接修飾されていると考えることができる。逆に、格助詞を伴っている場合は、複合している動詞句の中であって、動詞句全体が形容詞と複合して状況を叙述すると考えられる。次のaが状況叙述であり、bでは、ˈtrhönpaが修飾されている。

(2)a. ˈtrhönpa ˈti nää ˈchu ˈlen ˈlapo ˈree

・水を汲みやすい井戸に連れて行ってください

b. ˈtrhönpa ∅ / \*nää ˈchu ˈlen ˈlapo ci la ˈtrhiiroo nan · (同上)

3. 動詞に名詞化接辞-yaaを付加して、動詞句全体を名詞節化することによって、修飾されている名詞が、動詞句内にあるものか、その外であって主節に属しているかがわかる。

(3)a. ˈlamkaa ˈti ˈshikatse la ˈtro ˈtepo ˈree

・この道はシガツェに行きやすい

b. \*ˈlamkaa ˈti ˈshikatse la ˈtroyaa ˈtepo ˈree

c. ˈlamkaa ˈti nää ˈshikatse la ˈtroyaa ˈtepo ˈree · (同上)

aは、「この道」についての叙述であり、cでは、動詞句が波線部を含んでいる。

以上のことから、複合形容詞の構造について次のように考えておきたい。

(a) N+[[VP] Adj]<sub>AP</sub>

(b) [[N (CM) V]<sub>VP</sub> Adj]

(a)は、Nに対する修飾関係があり、全体で名詞句を形成する。GI格助詞を用いて、名詞を後置することもできる。また、形容詞文を構成することもある。(b)は、全体で状況の良好さや行為の容易さを叙述する。(たかはしよしはる、博士後期課程)

森本順子

副詞という周辺のなカテゴリーは、整理しきれない要素が放りこまれており、日本語については山田孝雄以来の下位分類がだいたい継承されて来ていると言っているが、これは曖昧な意味的基準にもとづいている。それぞれのカテゴリーの成員については、どこにもはまりきらなかったり、二つ以上のカテゴリーにまたがったりするものも見られる。そういった副詞の錯綜した状態は新しい下位分類を生んだりしているが、語彙的意味のみが基準になることが少なくない。副詞群を体系化に導くひとつの方法として、統辞論的特徴を中心にして考察する必要がある。これは本来副詞の全体にかかわる問題であるが、ここではその一步として主観性をあらわすと考えられる副詞類（いわゆる陳述副詞に相当、以下主観性の副詞と称する）の内部的な多様性を観察する。取り上げた特徴は、（１）Sentence Typeとの共起関係、（２）文代名詞化との関係、（３）述語の意味的タイプとの共起制限、である。これらの特徴は、主観性の副詞類が既存のカテゴリーとして最も対立的な位置にあるいわゆる様態の副詞と最も明確な相違をしめすものと考えられる。主観性の副詞類は、（１）については、ただひとつの文型とのみ共起するという制限がある。（２）については、文代名詞化の中には含まれることがない。また、（３）について、述語の特定の意味的タイプとの間に共起制限は持たない。一方、様態の副詞はいずれについても主観性の副詞とは対立的な違いを示す。したがって、これらの特徴は範疇的な相違を示すとみなすことができる。しかし、ここでサンプルとして取り上げた26の主観性の副詞類についてみると、この三つの特徴をいずれも備えた副詞の数は限定されており（多分、さいわい、など）、二つ（まさか、など）ないしひとつの特徴（さぞ、など）しか備えていない副詞が多く観察される。英語（等）におけるほぼ対応する種類の副詞の研究に比して、日本語の主観性の副詞は統辞論的特徴に関してより灰色の領域が多く、明確な線が引きにくいという状況がみられるのである。これを体系的に再編成するには、最も重要な特徴を色濃くしめすものをプロトタイプとしてとらえ、その濃淡に応じた配置をすることが言語的現実にも最もあっているのではないかと考える。これは、既存のカテゴリーをこえて、つまり、従来ならば配属の不明なものについても適用可能である。実際には、上にみられるような曖昧領域は主観性の副詞のみならず、周辺成分全体にわたっており、全体を体系化するには基準となる特徴の精密化が必要となる。

（もりもと じゅんこ、京都教育大学）



## コエグ族の多言語使用について

稗田乃

調査地：エチオピア西南部、南オモ州、クチュル村、推定人口、350～400。76戸のうち1戸を除いて、全てが、コエグ語（スルマ言語群）を第1言語とし、第2言語として、カラ語（オモ言語群）とブメ語（ナイル諸語）を話す。、これらの言語は、系統的にも、構造的にも離れており、伝達は不可能である。

調査内容：1) 幼児から成人まで、286名に面接し、これらの言語を聞き、理解できるか、話すことができるかを尋ねた。2) 46名には、50語を選んで、これらの言語についてどの程度の能力を持っているか調べた。3) 43名に面接し、話す相手により、また、どんな話題のときに、どの言語を用いるかを尋ねた。

調査結果：第1言語のコエグ語を習得し、ついで、カラ語を、最後にブメ語を習得する。習得の時期に関して、男女差はない。但し、ブメ語については、習得の時期が過ぎても、多くの女性は、話し、聞くことができないと答えている。この調査1)の結果を調査2)と比較すると、カラ語に関しては、自己申告と能力テストとの差はない。一方、ブメ語に関しては、自己申告よりも、実際の能力テストが低い数字になる。特に、男性は、実際の能力よりも、高く自己申告している。これは、コエグ社会でカラ語が、第2言語として成熟しており、ブメ語が、ある特定の性格を帯びた言語であることを示している。調査3)によれば、男性は、年長の男性に対してよりも、同世代の男性に対して、極めて高い頻度でブメ語を使用する。また、政治的な話題と他人の噂話にブメ語をよく使用する。一方、カラ語は、どのような相手にも、どのような話題にも、広く用いられ、使用の頻度に男女差もない。このことから、ブメ語が帯びた特定の性格とは、政治的権威と考えられる。

農耕、牧畜、狩猟および漁猟、基本動作の意味領域に分けて、調査2)の結果を見ると、カラ語に関しては、どの意味領域においても能力に差はない。ところが、ブメ語に関しては、牧畜と狩猟および漁猟の領域の能力が他の領域よりも高くなっている。コエグの人々の中心の文化は、狩猟、漁猟であり、牧畜を中心の文化にしているのは、ブメの人々である。コエグの人々は、ドミナントのブメの文化（牧畜）に接近することによって、社会の生存をはかっている。その一方で、彼ら自身の文化（狩猟、漁猟）にも、注意を向けている。これは、彼らの社会そのものの生存と、文化（言語）の生存の両方を可能にするやり方といえる。

（ひえだ おさむ、大阪外国語大学）